

維新胎動の地の誇りみなぎるまちづくり 先人の志に倣う新たな《元気》への胎動

のむらこうじ
野村興児
萩市長

まちの資産を活用した 「萩まちじゅう博物館」構想

江戸時代の町並みが残る都市は少なくな
い。だが萩市中心部(旧萩城下)ほどの質量を
備えた江戸の町並みは全国的にもまれだろ
う。何しろ萩城下の町割りは今から約400
年前、関ヶ原の戦いの直後に萩藩開祖の毛利
輝元が実施した当時そのままといわれる。

その背景には幕末期に藩庁が現在の山口市
に移ったことにより、近代以降の急激な都市
化の波から免れたことや、戦時中に戦災に遭
わなかったことなど、いくつかの要因が指摘
されている。それは半面、近代都市としての
発展という意味では歓迎すべき事柄ばかりで
はなかったはずだが、結果として江戸時代の
町並みが損なわれずに済んだ。そして町並み
が伝える激動の歴史ストーリーとともに、萩
市民にとってまさに先人たちの「遺産」が残さ
れたといえるだろう。萩市を訪れば、その

ことが如実に実感できる。
例えば幕末維新の主役となった木戸孝充の
旧宅、高杉晋作の誕生地などが当たり前のよ
うにさりげなく並ぶ武家屋敷街の奥深さは、
訪問者を束の間のタイムスリップの気分につ
わすにおかない。

萩城三の丸にも通じ、藩主も駕籠に乗って
通行した御成道の両脇には、今も現役で営業
しているかのような格子造りの旧商家・町家
が立ち並ぶ。外見的にそれほど目立たない小
さな路地を入っても、瓦を載せた土塀の陰か
ら、まげを結った侍や町人がいつ現れても不
思議でないような町並みが続いている。

昭和51年に全国初の「重要伝統的建造物群
保存地区」(当時は堀内地区、平安古地区の2
地区。現在は港近くの浜崎地区と合わせ3地
区)に指定されたのも当然のことと納得でき
る。さらに素晴らしいのは、昭和42年の国史
跡への指定を契機に盛り上がり始めた一部市
民の町並み保存運動が全市民的な共感を呼び、

重要伝統的建造物群保存地区に指
定される以前の昭和47年の段階で、市
独自の「歴史的景観保存条例」が全国に先
駆け策定・施行されていたことだ。

新たに再現された町並みではない。江戸時
代そのままの町並みが今も大規模なブロック
で残る萩市の中心部には、実際、400年以
上にわたる歴史の積み重ねが、大げさでなく、
地域全体に独特な伝統的アトモスフィア(雰
囲気)を醸し出している。

「それがまさにオープン・エア・ミュージ
アム(野外博物館、屋根のない博物館)の基本
概念なんですね。萩市は現在、市民と行政が
一体となって『萩まちじゅう博物館』構想を基
にしたまちづくりを推進しています。その
キャッチフレーズは『江戸時代の地図がその
まま使えるまち』なのです(笑)」

そう語るのは野村興児萩市長である。「もっ
とも……」と野村市長は続ける。「萩市民は昔
から中心部の町並みをひそかに誇りに思っ
ていました。しかし、一部の市民を除いて、
それが例えば学術的・文化的にどれほどの価

値を持つてい
るかというこ
とについて
は、国の史跡
に指定される
まであまり気
付いていな
かった。むし
ろ近代化に乗
り遅れた不便
なまちという
マイナスイ
メージを持つ
人々も少なく
なかったとさ
れます。その
一見不変なま
ちの持つ本当
の価値を改めて気付かせてくれたのは、萩を
熱心に訪れてくださる旅行者や学者など、主
に外部の皆さんからの指摘でした」



平安古地区に残る鍵型に曲った土塀・鍵曲

だが今は違う。「萩まちじゅう博物館」構想
に基づくまちづくりの主役は、紛れもなく一
般の市民である。

市民の参画意識にも大きな効果

萩まちじゅう博物館構想は平成16年、萩
開府400年の節目を記念して建設された
「萩博物館」が開館した時点から、実質的にス

ターゲットしている。しかし、その構想が具体化
し始めたのは、それ以前の平成14年、国交省
の補助事業「まちづくり総合支援事業(現・ま
ちづくり交付金事業)」の交付を受けたころで
あった。

萩市では当初、まちづくり総合支援事業と
して都市計画課が主体となり、歩道の整備や
電線地中化、広場整備などのハード事業を行
うことが決まっていた。しかし、野村市長が
そこで一つの決断をするのだ。

「今の時代にまちづくりにかかわる事業を
行うなら、行政主導の事業であってはいいな
い。市民の参加による、市民のためのまちづ
くりしなければ意味がないと考え、まず総



江戸時代に松本川の流れを引き込んだ藍場川の水路が見せる涼しげな風景



玉江浦地区に江戸時代から伝わる和船競漕・おしくらごう(毎年6月)



「萩まちじゅう博物館」構想の中核施設・萩博物館は人気

いただき、そこからまちへ出て、萩のまちじゅうに今も残る歴史の《現物》を体感していただきたいとの願いが込められています。同時に萩博物館は、まちづくりへの市民参画、協働事業の拠点施設でもあります。「NPO萩まちじゅう博物館」の事務所も博物館内に置かれ、萩市の都市遺産を守り育て、次世代に継承していくための総合的な中核施設なのです」（野村市長）。

萩博物館の存在が萩まちじゅう博物館構想の扇の要の役割を果たしているように、NPO萩まちじゅう博物館（会員数は現在177人）は、まちづくりに参加する意思を持つすべての市民にとってのよりどころになっている。特に萩市の都市遺産の再発見という意味で



萩藩の経済を支えた海産物の老舗などの遺構が並ぶ浜崎地区

合支援事業の担当部署を都市計画課から企画課に移しました。さらに市民と行政が手を携え、市民と萩市共に市全体の将来を考えると、ソフトとハードを兼ね備えた総合的な協働事業とすることを決断したのです」

その結果生まれたのが「萩まちじゅう博物館」構想だった。萩市は平成15年、手始めに市民参加の「まちじゅう博物館シンポジウム」を開催する。「萩まちじゅう博物館」構想はこのシンポジウムで初めて公にされ、全国発信された。

さらに同年、総合支援事業の対象地区である「堀内地区」「藍場川地区」「浜崎地区」「旧松本村地区」の4地区代表の市民、商工会議所および観光協会、学識経験者など計30名によ

る「萩まちじゅう博物館整備検討委員会」を開催した。

このうち堀内地区は武家屋敷の並ぶ旧城下町地区、浜崎地区は萩港付近に位置し、主に海産物を扱う江戸・明治以来の商家が並ぶ地区だ。両地区とも伝統的建造物群保存地区に指定されていることは既に述べた。藍場川地区は松本川から江戸時代に引かれた水路を中心に、非常に趣のある伝統的町並みを今に残す地区である。また旧松本村地区は明治維新胎動の思想的指導者とされる吉田松陰の生家や松下村塾などがあつた地区として知られる。

この話し合いの中で町並み整備・保全に関するさまざまな意見（道路の色から建物の維持・保全まで）が出たが、より重要なのはその過程で「まちづくりを推進するためのNPO法人」の立ち上げが提言されたことだった。

萩市はもとも市民ボランティアの盛んな土地柄で知られる。地域清掃や史跡の維持・保全などには、各地区の住民が競って参加する傾向が強かった。それは折り目正しい城下町に暮らしてきた人々の間に、伝統的かつ自然発生的に培われてきた美風といえる。そうした市民の「資質」をより有効に、なおかつ自



世界有数の「小さな火山・笠山」。山すその夏でも涼しい風穴に集まる観光客。下はクロダイなど海の魚が群れることで知られる明神池



世界文化遺産に暫定登録された萩反射炉（幕末期に洋式鉄製大砲を造るための試験炉として築造）

ケールアップしていく。「萩市『維新胎動の地』という発想からわれわれ外部の人間はつい、萩市のイメージ核を旧城下町としての雰囲気ばかり求める傾向がある。

だが萩市における旧城下町は、エリアとして広くない。この地区は日本海に注ぐ阿武川・松本川の両河口に挟まれた三角

注目されるのは、文化財には未指定でも市民にとっては価値のある「各地区のお宝」を積極的にリスト化し、それを守るためのワンポイントラスト運動である。市内数カ所の公共施設に募金箱を置いて、観光客や市民有志から100円の信託金を募り、文化財未指定であるために税金の活用ができない歴史的物件（例えば旧家の門）の修繕費などに充てられている。萩まちじゅう博物館構想を通じ、このようにして醸成・拡大されつつある市民の参画意識は、NPO団体だけでなく市内各地区の市民団体やグループの活動にも大きな刺激をもたらし、ジャンルを問わず市民活動の活性化をもたらしている。

萩市の「お宝」は城下町だけではない

当初は歴史遺産を核に展開され始めた「萩まちじゅう博物館」構想の包含する内容は、やがて参画する市民の拡充とともにス



市民が木戸公と親しみを込めて呼ぶ木戸孝允の生家

州に形成されているが、平成15年の1市2町4村による大型合併で総面積約700㎓となり、山口県の11%強の面積を持つに至った萩市全域から見れば、それはほんの一部なのだ。萩市には大小さまざまな離島部もあれば、

「長州ファイブジュニア語学研修」は平成18年度から始めた事業です。長州ファイブにちなんで5人の中学生を公募し、ロンドン大学のサマースクールで語学研修を受けてもらいました。この事業の財源は市民からの篤志でまかなっており、今年の夏で4回目を迎えました。「野村市長」

市民からの篤志で次代を背負うべき頭の柔軟な中学生をイギリスに派遣するという同事業は、いかにも萩市にふさわしい。幕末期の長州ファイブの留学は密航であり、平成の長



毛利氏の伝統を受け継ぐ萩大名行列などが人気の萩時代まつり

「萩まちじゅう博物館」構想がスタートして以来、地元萩市に対する市民の参画意識が大きく変わり始め、幕末期の志士の再来が期待される次世代のイギリス語学研修が始まった。



明治維新の原動力となった俊英をはぐくんだ松下村塾の教場

時を同じくして、平成18年度には九州各地の自治体（北九州市、唐津市、長崎市、大牟田市、荒尾市、宇城市、鹿児島市）からの呼び掛けに応じ、下関市とともに萩市は世界遺産への登録を目指す「九州・山口の近代化産業遺産群」（萩市の近代化遺産としては萩反射炉、恵美須ヶ鼻造船所跡など）に参加し、暫定一覧表に登録されるに至った。

そして折しも今年度は、維新胎動の始祖とされる吉田松陰生誕180年の節目を記念し、萩市内でさまざまな事業が行われている。

明治維新以来、市民自ら「あまり大きく動くことがなく、太平の眠りに埋没しかけていた」と自認する萩市に、未来に向けての新たな胎動が始まった——。そんな印象を感じずにはいられない取材であった。

（取材・文 遠藤 隆）

中山間地域も多い。自然も人情も文化も多様だ。野村市長が全国伝統的建造物群保存地区協議会会長であると同時に全国中山間地域振興対策協議会会長であり、全国離島振興協議会、全国漁港漁場協会や全国山村振興連盟などの幹部でもあることがそれを如実に物語る。

「萩市および「萩まちじゅう博物館」構想のイメージ核は確かに旧城下町であり、吉田松陰先生をはじめ木戸孝允公、伊藤博文公、高杉晋作などが活躍した維新胎動の地ということになります。しかし一方で、その枠には収まりきれない多様な自然があり、人々の多彩な営みがあります。「萩まちじゅう博物館」構想はそもそも、豊富な歴史遺産を活用することから発想されました。しかし、それがある程度の成果を見せつつある現在、私は将来的に萩市にある《人・モノ・こと》、すなわちすべての風物を天然の展示物にとらえ、萩市全域を屋根のない博物館として全国の人に認識



萩商港から船で20分の最も近い離島・大島

していただけを目指したいと考え始めております」（野村市長）

萩市には地域の核になるような産業がこれといってない。郊外にある萩焼の登り窯を除けば、特に中心市街地には、ものづくりを象徴するようなものは多くない。

近代化に乗り遅れたために、産業構造的にも「第一次産業か観光業しかない」（野村市長）と市民の多くが自認してきたまちでもある。産業がないために若者たちの大都市圏への流出が続く、現在の高齢化率は国の平均を大きく上回る約34%にも達している。市域の多くを占める中山間地域、沿岸部、離島の高齢化率はさらに高く、解決すべき地域の課題は少なくない。

だがその代わりに、今や「広大な市域全体に展開する多様な事物を外の人にぜひ見てもらいたい」と市民が胸を張っている。「お宝」が満載の都市として、独自の存在感と輝きを放ち始めつつある。それはまさに「萩まちじゅう博物館」構想が始まり、深化と同時に包含する意味・意義がスケールアップするにつれ顕著になり始めた現象といえる。

これは次世代育成施策や医療体制、子育て支援策など、将来の萩市の発展を担う各種施策にも見てとれる。

中でも幕末期に人材の宝庫とうたわれた萩

伝統にちなむ人材育成、都市としての新たな胎動



旧長州藩の俊英たちを育てた藩校・明倫館の遺構を生かした明倫小学校

らしく、次世代育成施策において「長州ファイブジュニア語学研修」というユニークな事業が行われている。

「長州ファイブ」とは幕末期、鎖国体制を続ける幕府に無断で英国留学を果たした5人の長州藩士を指して、今も彼の地と呼び慣わされてきた尊称である。地元萩では長州5英傑と表現されてきたこの5人の留学生の名は井上馨（後に明治政府初代の外務大臣）、伊藤博文（同初代内閣総理大臣）、井上勝（同鉄道庁長官）、遠藤謹助（同造幣局長）、山尾庸三（同工部卿）。